

# ひらくびつかん

HIRATSUKA CITY MUSEUM '88 9月号

## \*\*\* 9月の行事 \*\*\*

9月

- |       |  |   |               |
|-------|--|---|---------------|
| 3     |  | 土 | 古文書講読会／土曜観察会  |
| 4     |  | 日 | 自然観察会“江の島植物園” |
| 10    |  | 土 | 石仏を調べる会       |
| 11    |  | 日 | 体験学習“裏打ち”     |
| 14～15 |  |   | 天体観察会         |
| 17    |  | 土 | 古文書講読会／土曜観察会  |
| 18    |  | 日 | 相模川を歩く会       |
| 24    |  | 土 | 石仏を調べる会       |
| 29    |  | 木 | 星を見る会“火星を見よう” |
- ・寄贈品コーナー：道具の歴史 Part 4  
(9/21～10/30)
- ・プラネタリウム：火星大接近  
(9月13日～10月30日)

### ●星を見る会“火星の観察会”

博物館では、この秋に火星を見る会を計画しています。ぜひご参加ください。

- ・日時：9月29日～11月11日（全7日間）  
9/29～19:30～21:00  
10/7、14、21～18:30～20:00  
10/28・11/4、11～18～19:30

- ・場所：博物館屋上

- ・参加方法：自由。当日晴れているのを確認して参加してください。雨天、曇天時は中止します。

### ●体験学習「縄文式土器を作ろう」

世界の焼き物史の中でも、一際目を放った縄文式土器を、遺跡から出土した土器を参考にして作り上げます。

- ・日時：10月12日（水）・13日（木）、  
10月23日（日）  
午前10時～午後4時
- ・場所：博物館科学教室
- ・対象者：一般20名、ただし3日間参加できる方。
- ・申し込み方法：往復はがきで、住所・氏名・電話番号を明記の上、9月24日まで博物館へ。  
多数の場合は抽選をします。

### ●特別展「神奈川の植物」

会期：10月15日（土）～11月20日（日）

会場：特別展示室

記念講演会：

11月20日（日）午後1時30分～4時

テーマ／「植物写真の撮り方」

講師／永田芳男氏（植物写真家）

会場／講堂（入場自由）

神奈川県では、県立博物館・横須賀市自然博物

館そして平塚市博物館が共同し、多くの市民の方々の参加を得て、全県的な植物相の調査が行われてきました。この調査は9年間続けられ、その成果が今春「神奈川県植物誌」として刊行されました。

この特別展はそれにちなんで、神奈川県を代表する植物や、各地域の特徴を紹介するものです。多くの美しい生態写真や模型、標本さらに分布データを表示するマイコンを展示します。（浜口）



## 雨に降られたサマーセミナー

今年で10回目を迎えた博物館のサマーセミナーが、8月9日から11日まで、土屋の七国荘で行われました。

初日の9日は、5班に分かれて、中井町の井ノ口方面でオリエンテーリングを行いました。義笠神社の大ケヤキを見たり、水道の取水施設を訪ね土手に植えられたシュロの木を初めて見た人も多かったです。

10日は4つの観察班に分かれて活動を行いました。地理班は琵琶で化石の採集、考古班は遠藤原で土器片の採集、生物班は矢沢で大木の調査、そして歴史班は太平洋戦争で戦死した土屋の人たちについて調べました。強い雨が降り出しましたので、午後は室内で調べてきたことのまとめをしました。

このサマーセミナーのようすは、11月に寄贈品コーナーで紹介する予定です。（浜口）



二三のスポット



### ・ヒヨ鳥ヒヨちゃん

博物館前庭に巣から落ちた赤ちゃん鳥がいました。新藤幾子さんが預かってましたが、8月16日、元気よく帰ってきました。ヒヨちゃんと呼ぶと「ピーヨピーヨ」となきます。小さな羽根もひろげます。無事にお空にかえれるといいですね。



3

火星面の経度、がこちらを向く時刻にしるししてあります。ある日のある時刻がとのしるしの中間だつたら、その時はくらいがこちらを向いていることになります。図2でそこにどんなもようがあるか調べられます。

# 火星大接近

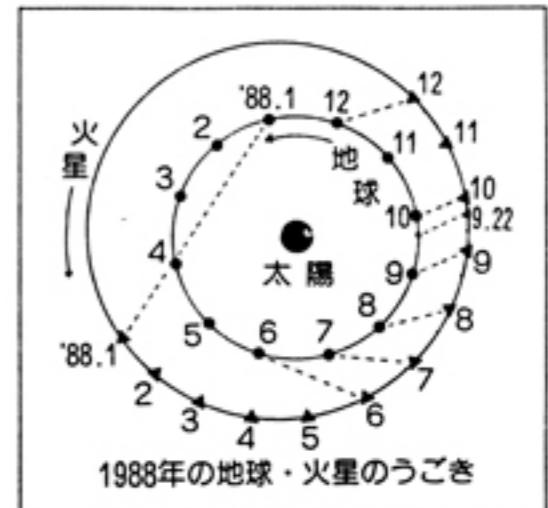
なぜ大接近か？

大接近中の火星が夜空に赤く照り輝いています。火星は太陽系第4惑星。地球の「ひとつ外側」の軌道です。太陽からは平均で2億3千万キロの距離があります（地球は1億5千万キロ）。公転周期は地球の方が短いので、およそ2年ごとに地球が火星を追い抜く形となり、この時「火星接近」となります。上の数字から単純に計算すると、地球が火星と太陽の間にいる時、地球～火星の距離は8千万キロですね。ところが、火星軌道は正確な「円」ではなく、両者のコースは接近するところと離れているところがあります（図1）。およそ、地球の8～9月にあたるコーナーで最も軌道が接近しており、たまたまこのあたりで追い抜くことになると、「大」接近なのです。今年、地球は9月30日に火星と太陽の間を通過します。火星と最も近づくのは9月22日で、距離は約5千9百万キロ。さきほど単純計算した値よりずっと近いですね。

どのように見えるか？

ひと目で「明るい！」とわかります。年初には明るい2等星程度でしたが、-2.8等まで明るくなり木星と肩を並べます。

また、これは望遠鏡で観察する場合ですが、近い分大きく（ふだんの数倍も）見えるわけですから、表面のふるうなどを見るチャンスです。



1

火星表面のもよう

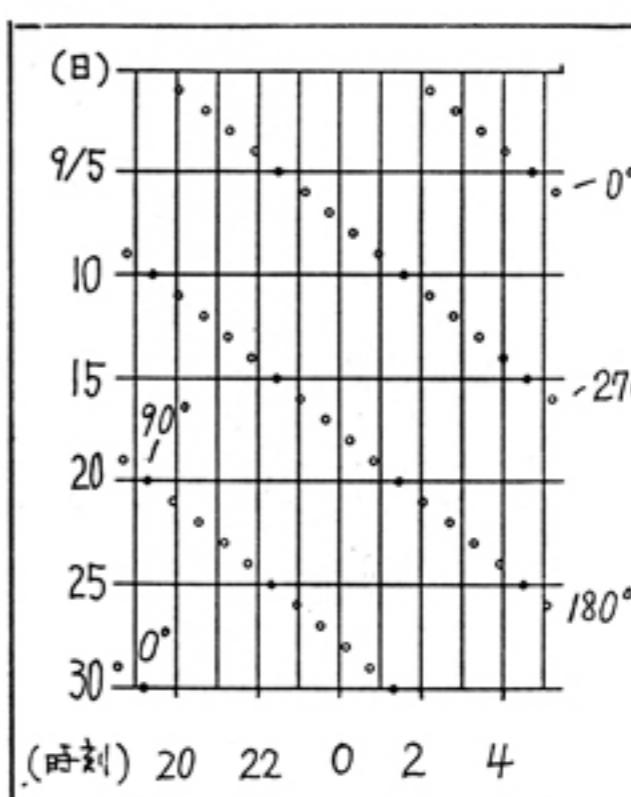
火星は今南極側をこちらに傾けています。白い氷の「極冠」が見られますが、火星南半球が夏なので極冠は小さくなっています。

また、月面の海などのような淡い暗色もようがあり、それぞれ名称がついています(図3)。火星の自転につれこちらを向いている部分が変わりますから、図2を使って確めて下さい。もよろしくいためわかりにくいかかもしれません。大シルチスなど目立つ部分がこちらを向く時をねらうのもひとつ的方法です。

## ポイント

望遠鏡では、火星がある程度高くなつてから、  
高倍率で見ます。星の「またたき」が少ない夜が  
好条件です。

なお、博物館でも「星を見る会」で火星を見ます。くわしくは1ページをごらん下さい。(沢村)



2

## - 弥生土器は語る - 夏期特別展より -

野山に狩り果実を採った暮らし（縄文期1万年間）から、田を拓き稻を植え育てる技を知った弥生期に移ると、燃え上がる炎のような縄文土器に替って、おっとりと優しい土器が現れた。言ってみれば、弥生土器は、稻作農耕を主とする食糧生産の段階に入ったことを証す器と言つてよい。その文化圏は九州から本州北端にまで広がった（北海道を除く）のである。主な器は壺だが、他にかめ・鉢・高杯がつくられ、壺やかめには蓋付きのものもある。用途に従つて大小（人が入れるのから手の平にのるのまで）あり、把手付きのカップや水差（弥生独特のもの）は形もなかなかモダンである。焼成後に彩色した赤彩文を始め、鉢や高杯・杓子には漆仕上げもあるそうだ。弥生人は絵も描いた。最も多いのは鹿で、鹿と建物を組合せたり、手をあげた人物画もある。機会があつたら探しみてください。

磨製石器や石庖丁の出土もこの期なら、この時代には木工用工具がととのつたので、割物による木製容器が沢山作られた。土器の形を木器に写したもの、逆に木器から土器に委匠を取つたものもある由。非常に大きなものや手荒に使う器なら、なるほど木器の方が作るにも使うにも容易である。土器の形や文様（線描きによる幾何学文、櫛描きによる流水文や簾状文）は、地方地域で特色があるが、似通つたものもずい分ある。女の通婚圏の現れとする説があるところをみると、原始の頃、土器のつくり手は女であったのかも知れない。

今から2300～2400年前に始まつた弥生時代は、500～600年栄えて次の古墳時代に席をゆづつた。土器もここから土師器になる。

さて、ここで問題です。現在ただいまの私達の暮らしは、はるかな後代に何を残すでしょうか。お答えを博物館にお寄せください。（和田）



大阪府船橋遺跡出土